

当院整形外科における研修医向け英会話教室

岡山赤十字病院 整形外科

小西池泰三

我々は2016年8月より主に研修医を対象として英会話教室を行っている。

今回、この取り組みについて紹介する。

第51回日本赤十字医学会総会における整形外科部長会で秋田日赤が研修医を対象とした英会話教室を行っているとの報告を聞いて、興味を持ったことがきっかけである。当院看護学校の英語教師に外人講師を紹介してもらい、週一回、1時間の授業を行っている。秋田日赤の指摘にもあったが、救急病院では早朝でないスタッフが揃うことは困難であり、教室の開始は朝7時としている。当科はスタッフ7人、後期研修医4人の体制であるが、英会話教室参加者は部長、卒後10年のスタッフ2人と後期研修医4人である。当科ローテーション中の初期研修医にも参加してもらった。

外人講師はフィリピンからアメリカへの移民の2世で、大学卒業後に日本の文化に興味を持って来日したとのことであった。研修医からは「文法や発音が間違っている程度通じることがわかった。英語を話す際に壁がなくなった。」「日本と海外の文化の違いを知り、興味深かった。」など概ね好評であった。中堅のスタッフからは「仕事の時間が不規則で英会話教室に行けなかったが、この取り組みはありがたいと感じている。」とのことであった。

この取り組みが可能であったのは看護学校の英語教師および外人講師本人の厚意によるところが大きい。早朝でないこのような取り組みは困難であり、今後の課題として、早朝でもレッスン可能な質の高い外人講師を持続的に確保できるかが問題である。この取り組みのアウトカムであるが、少なくともスタッフのモチベーションの向上には有用であったと考えている。

骨転移早期発見のための院内システム「骨転移コンサルテーション」の新設

武蔵野赤十字病院 整形外科

原 慶宏、山崎 隆志、小久保吉恭、浅井 秀明

昨今のがん治療の進歩は著しく、Stage4である遠隔転移を生じたがん患者の余命は急速に延長している。それに伴い骨転移のある担癌患者は増加の一途をたどり、我々整形外科医にとって骨転移に伴うADL低下を予防するための早期発見・治療システム整備は喫緊の課題となっている。この対応策として骨転移ボードの整備が挙げられるが、医師不足に悩む地域の一般病院では各科の医師が一堂に会して定期的に会議を行う時間を確保することは相当に困難である。これらの問題を解決するため当院では2017年1月より「骨転移コンサルテーション」システムを開設した。特長として①通常のコンサルテーションとは異なり患者の受診が不要のため、いつでも相談可能であり問題発生から解決までの時間が短縮できる。②医師以外もオーダーすることが可能（一部制限有）でありコメディカルの気づきを早期に汲み上げることができ。③骨転移の発見された患者は原則全て登録するシステムであり、主治医の能力にかかわらず骨転移イベントの発生を予知・予防することが可能となる、等が挙げられる。なお、問題が複雑であり整形外科医単独の方針決定が困難な場合のみ各科横断的会議（当院ではMTB:Musashino Tumor Boardと呼称している）を開催して合議の上方針決定することとしている。開設から4か月間で40名の登録があり、その内訳は男25名女15名、平均年齢72歳、原発診療科は泌尿器科14名呼吸器科8名乳腺科4名消化器科3名その他11名、外来患者が29名入院が11名であった。現在まだ院内全体への周知が十分とは言えないため、院内講演会や広報・掲示板などを利用して周知を図っている。本システムは我々整形外科医の負担増加を最小限に抑えつつ、これまで全てを背負っていた原発診療科主治医の負担軽減が可能となる試みであり骨転移早期発見・介入に有効であると考えられる。